情報科学芸術大学院大学附属図書館

IAMAS 図書館便り

vol. 14
2020.1

IAMAS［イアマス］とは、情報科学芸術大学院大学の英語表記の頭文字を取った略称です。

《GAINER》IAMAS プログラマブル・デバイス・プロジェクト（2006 年 6 月～2007 年 3 月）
写真提供：NTT インターコミュニケーション・センター［ICC］

特集 メディアデザイン 小林茂

→自著を語る／思い出の一冊／学生に薦める一冊

●図書館を活用する　●木村伊兵衛写真賞 歴代受賞写真集展

特集　メディアデザイン　小林 茂（こばやし しげる）

この特集では、 IAMASの教員に、自著・思い出の一冊・お薦めの本などを紹介してもらいます。第14回は、小林茂教授です。

→自著を語る

GainerBook Labo＋くるくる研究室『+GAINER―PHYSICAL COMPUTING WITH GAINER』
九天社（2007年）、オーム社（2008年）

この本は、当時IAMASにいた教員と学生の有志チームで取り組んだ非常に思い出深い本です。メディアアートやデザインを学ぶ人々が、エレクトロニクスやプログラミングに興味を持つきっかけとなる魅力的な本をつくろう、という理想を掲げて全力で取り組みました。雑誌記事の経験はある程度あったものの書籍をつくるのは初めてだったこともあり、編集の大内孝子さん、エディトリアルデザインの中西要介さんには多大なご迷惑をおかけしました。また、出版の翌年に出版社が倒産し、弁護士事務所と密に連絡を取りながら別の出版社からの再販に、といった事件も貴重な経験でした。気がつけばもうあれから12年、おかげさまでその後何冊もの本を送り出す機会に恵まれましたが、熱さにおいてこの本を超えることはないだろうと思います。

オーム社／2008年

→思い出の一冊

ヒューバート L. ドレイファス『コンピュータには何ができないか―哲学的人工知能批判』
黒崎政男・村若修（翻訳）、産業図書（1992年、原著1979年）

哲学者による人工知能批判の書として現在でも必ず言及される一冊。当時の私は、生理心理学や精神生理学を学ぶ学部生で、人や動物を用いた実験中心の自然科学的方法論に疑問を抱いていました。たまたま大学の書店でこの本を手に取って興味を惹かれて読み、以前より興味を持っていた哲学のゼミに聴講生として参加し、この本における議論の一部を紹介する発表を行いました。その後、たまたまその話を耳にした先輩に誘われ、設立後間もない人工知能学会に参加し、今では大御所として知られる研究者の方々の発表を聴いて刺激を受けたことは四半世紀もの間忘れていました。しかしながら、ここ数年の第3次人工知能ブームをはじめとする社会的な変化により当時の興味が再起動され、Archival Archetypingプロジェクトの立ち上げに至りました。なお、ドレイファスは残念ながら2017年に亡くなりましたが、その直前にポストモダン思想の相対主義に異を唱えて多元的実在論を打ち出し『実在論を立て直す』（2016年、原著は2015年）を出版するなど、いくつもの重要な問いを投げかけた哲学者でした。

産業図書／1992年

→学生に薦める一冊

若林恵（責任編集）『NEXT GENERATION GOVERNMENT―次世代ガバメント 小さくて大きい政府のつくり方』日本経済新聞出版社（2019年）

日本経済新聞社
／2019年

IAMAS 2019のトークイベントにゲストとして登壇していただいた若林恵さんが『NEXT GENERATION BANK―次世代銀行は世界をこう変える』に次いで最近出版したムック。この本で若林さんは、小さな政府（公的なサービスを民営化して市場に委ねる）か大きな政府（公共サービスを行政府が丸抱えする）かという二者択一ではなく、テクノロジーを活用することで小さくて大きい政府（行政府は極小だがサービスは極大）を実現できるのではという問いを投げかけます。イギリス、インド、デンマーク、フィンランド、エストニアなど豊富な事例を参照しつつ、鍵の1つとして地方政府に着目するなど、非常に興味深い本です。どれだけの方が意識しているのか分かりませんが、IAMASは岐阜県という地方政府が運営する公立の教育機関です。この本の中で紹介されている事例について知り、21世紀において公共はどう在るべきか？という問いを自分たち自身に投げかけてみることにより、アート、デザイン、工学、社会科学など、従来の学問領域で分断した発想の中では決して見えない視座に到達することができるのではないでしょうか。

図書館を活用する その8 レファレンスサービスをご存じですか？

図書館のサービスのなかで、あまりなじみが薄いサービスに「レファレンスサービス」がある。レファレンスサービスは、参考調査などと訳されるが、適当な日本語訳がないままカタカナで用いられることが多い。適当な資料が見つからないときや文献の探し方が分からないといったときに、司書が図書館にある資料を使ってアドバイスをしたり、他の図書館や専門機関を紹介したりするサービスである。

レファレンスサービスがどのようなものかイメージするには、具体的な事例をみてみるとよい。国立国会図書館が整備しているレファレンス協同データベース（右図。https://crd.ndl.go.jp/reference/）では、全国の県立図書館をはじめとするさまざまな図書館が窓口などで受付けた利用者からの質問と、それに対する図書館の回答事例を知ることができる。最近では、Twitterを使ってデータベースに登録された事例紹介もしていて（@crd_tweet）、多くリツイートされて話題となる事例もある。

レファレンスサービスはどの図書館でも力を入れて取り組んでいる。図書館の窓口に行けないときでも、メールなどで対応している図書館も多い。特に、ある地域について調査している場合は、そこの図書館にしかない資料が必要となってくるだろう。そういうときには、図書館のWebサイトでレファレンスサービスを申し込んでみよう。親切に対応してくれるはずだ。その際には、すでに調査済みの文献やどのような資料を探しているかといったことを具体的に伝えよう。レファレンスサービスとは、利用者と司書の共同作業なのである。

木村伊兵衛写真賞 歴代受賞写真集展

IAMAS Library Art Spaceでは、2020年1月9日から本図書館が所蔵する木村伊兵衛写真賞の歴代受賞者による写真集を集めて一望する「木村伊兵衛写真賞歴代受賞写真集展」を開催しています。本図書館は、メディア表現研究科を要する大学院大学附属図書館であることから、メディア表現に関係する書籍、その中でも写真集については重点的に収集を続けてきました。
複数の写真を一冊にまとめて出版したものを写真集とするなら、世界初の写真集は1841年に出版されたタルボットの『自然の鉛筆』なのだそうです。20世紀以降、写真は印刷技術と結びつくことで、多種多様な写真集として書店で流通してきました。写真家にとって写真集は額装した写真を壁面で鑑賞する形態とは別の表現としてあるはずです。近年では絶版になった写真集が高額で取引きされることも珍しくなく、美術品のように扱われることも少なくありません。
本展が、44年間にわたる写真表現について再考する契機になれば幸いです。なお、現在入手不可能な写真集もあり全て揃っていません。ご了承ください。（前田真二郎／IAMAS附属図書館長）

＜木村伊兵衛写真賞について＞
戦前・戦後を通じて報道・スナップ写真などさまざまな分野で活躍した写真家・木村伊兵衛（1901－74年）の業績を記念して、1975年に朝日新聞社が創設した写真賞。2007年度から朝日新聞社・朝日新聞出版の共催となった。1年間の写真制作、発表活動に優れた業績を残した写真家に贈られる。発表は毎年の「アサヒカメラ」誌4月号にて行われる。新進気鋭の若手写真家が選ばれることが多いことから「写真界の芥川賞」と形容されることもあり、第26回には長島有里枝、蜷川実花、HIROMIXの若手女性写真家3氏が同時受賞して話題を集め、のちの「ガーリーフォトグラフ」の流れを作った。また第30回にはベテランの中野正貴が49歳で受賞、賞が求める「新しさ」は年齢の若さに依らないことを示した。（朝日新聞社『知恵蔵』より）

■開館時間　月－木　10:15－19:00　／　金　11:15－20:00

■休館日　　土曜日・日曜日・祝日、年末年始、臨時休館日（蔵書点検など）

■貸出
学生　　20冊・3週間以内
卒業生　5冊（図書のみ）・2週間以内
学外者　2冊（図書のみ）・2週間以内

＜学外の方の利用資格＞
・岐阜県在住・在勤の高校生以上の方
・東海地区大学図書館協議会加盟大学の学生
※自習目的でのご利用はお断りいたします。

情報科学芸術大学院大学［IAMAS］附属図書館 編集・発行
〒503-0807 岐阜県大垣市今宿6丁目52番地18 ワークショップ24 1F
TEL・FAX: 0584-75-6803　URL: https://www.iamas.ac.jp/lib/